

教育目標

【自分づくり】社会に目を開き 「なりたい自分」の姿を描き 実現しようとする人

- 自ら考え、表現できる人（創造）
- 仲間とともに高め合える人（共生）
- 心身ともにたくましい人（健康）

学校だより 第23号

ひらく

平成28年11月11日発行
須賀川市立第三中学校
TEL 73-2377
発行責任者：校長 高崎則行

円谷マラソン・岩瀬地区新人ロードレース大会で男子1位、女子5位 近さん（1年）、須藤くん（2年）は、個人の部で優勝

文化祭の記事を第22号に掲載したため時間が前後しましたが、10月16日（日）、これ以上は望めないほどの好天に恵まれ、第34回円谷幸吉メモリアルマラソン大会が須賀川アリーナをスタート・ゴールに開催されました。本校からは1、2年生を中心に男女合わせて150名を超える生徒が参加しました。また、美術部12名も競技役員として大会運営に協力して、走り終えた競技者に爽（さわ）やかな印象を振りまいていました。



この大会は岩瀬支部中学校新人ロードレースを兼ねており、1、2年生については、男女別に1年生の部、2年生の部、1、2年総合の部で競われます。集計の結果、次のように素晴らしい成績を収（おさ）めました。

団体男子

1年生の部：第2位 2年生の部：第1位
1、2年生総合：第1位

団体女子

1年生の部：第7位 2年生の部：第4位
1、2年生総合：第5位



第10位：中澤 心斗（しんと）
第8位：南條 竜汰（りゅうた）

個人男子

1年生の部 第6位：橋本 武英（たけひで）
第7位：鈴木 暉將（かがと）
第9位：安田慎太郎
2年生の部 第1位：須藤 雄哉（ゆうや）

個人女子

1年生の部 第1位：近 奏愛（ちか・かなえ）
2年生の部 第4位：加藤 優花（ゆか）



これも、これまでの鍛錬の賜物（たんれんノたまもの）であり、大きな成長と今後の可能性を示してくれました。

小学3年生のあこがれ、松明の運搬

いよいよ11月12日（土）の松明あかし本番が近づいてきました。9日（木）の運搬練習には、須賀川三小の3年生が見学に来てくれました。口々に『早く中学生になってやってみたい』と言い、運搬練習を繰り返す中学生に憧（あこが）れの目を注ぎながら、やがて「がんばれー、がんばれー」と声をそろえて応援し始めました。

練習終了後、何人かの3年生男子が私のところへ鉢巻（はちまき）を持ってきて「何か書いてください」と言うので、「堅忍不拔（けんじんふぼつ）」と顔料インクの筆ペンで書いてあげました。意味は「強い気持ちで耐え忍び、どんな困難にも動じないこと」です。

仲間とともに松明あかしを成功させて、高まった精神力で今後の生活を送ってほしいと思います。



図書環境が整備されました



本紙第1号で紹介しましたが、今年度は学校司書として保護者でもある松谷ゆき枝さんに週2～3日勤務いただいています。

これまで、図書室に入りきれない図書は空き教室などにおいてありました。少しずつ整理を進め、現在、図書室、3階多目的スペース、学習室の3か所に左上の写真のように表示をして、分類・配架（はいか）してあります。

「図書室に来る生徒は少なくないのですが、本を手にとって眺（なが）めるものの、貸出まではいかないというのが、2学期の図書室です。何か貸出が増える対策が必要かもしれません。考えてみます。」（8月31日）
「今日から図書館クイズを始めました。全部できる自信がないのか、手には取ってみるものの、また元に戻す生徒が多かったのですが、3人がかりで全問解いた1年生がいました。季語などは簡単に書いたのですが、出版社の名前などは難しかったようで、私の予想とは違っていたのが面白かったです。」（11月7日）

楽しみながら積極的に業務を行い、成果が徐々に（じょじょ）に表れてきました。

横断歩道の正しい横断と自転車横断帯の利用

朝の登校時間帯、横断歩道の向こう側で信号待ちをしている男子生徒が、自転車にまたがったままでした。私が「横断歩道は自転車を降（お）りて渡るんだよ」と声をかけると、うなずいて自転車を降りて横断しました。すると、私は気づいていなかったのですが、私の後ろに来ていた女子高校生も自転車を降りて横断歩道に向こう側へ渡っていきました。



学校前の歩道には自転車のマークがあり、あくまでも歩行者優先ですが、自転車も通行可能です。右の写真のように「自転車横断帯」のある横断歩道は自転車に乗ったまま横断することができます。歩道の自転車マークを指し示し、そのことを男子生徒に説明すると、「ありがとうございます」と応じてくれました。

その後、10日余りが過ぎましたが、その生徒は横断歩道では自転車を降りて正しく横断しています。今週になって別な男子生徒にも同じように指導をしました。その生徒は知らなかったのでしょう。目を丸くして聞いていました。この生徒も今日、正しく横断していきました。

その7 価値観の教育（家庭教育文献紹介「親でなければできない教育」より）



幼児期は大人の言いつけによく従います。小学校の半ばごろからしつけが難しくなります。これはむしろ健全な発達で、大人の言ったことが常に正しいわけではないことが分かるようになってくるからです。例えば、「お母さんは『ウソはいけません』と言ったのに、この前『忙しくて手が離せない』と電話を切って、テレビを見ていたじゃない。」というようなことを考えるのです。ですから、子どもが大きくなるにしたがって、親は自分の価値観や意思をしっかり確認しながら、理由を添えて子どもに語れるように準備をする必要があるのです。また、その裏付けとなる言動も大切です。

親が子どもとの生活の中で、ことあるごとに語り、示し続けていかななくてはならない価値観が3つあります。一つは、生命の尊重です。人間の生命はもとより、すべての生き物の生命を尊ぶという心を育てることが価値観の教育の基盤（きばん）です。

次に、一人一人には異なる人間性や個性があり、社会的に許されないものでなければ尊重するという事です。そのことによって、子どもは自分の考えや存在が価値あるものと信じることができ、個性を伸ばし、納得のいくより価値ある生き方をしようとするからです。それは生きがいの創造につながります。

また、自分の内面にある大切にしたいことを他人に対して行ったり、学校や地域の中で進んで実践（じっせん）したりすることが大事だという価値観です。価値あるものを他人や自分の所属する集団、世の中にばかり求めると、周りのせいにしたくなります。自分を取り巻く世界は、一人一人の価値観や意思の反映なのです。

人生は選択の連続です。意識して選択する場合も無意識に選択する場合も、その人の持っている価値観が必ず影響しているのです。